雨のしのび逢い（1960）

MODERATO CANTABILE

メディア 映画
ジャンル ドラマ　ロマンス
製作国 フランス
色彩 B&W
時間 105分
初公開日 1961/10/15
公開情報 東和

【解説】

Ｍ・デュラスの原作・脚本による“愛の不安”を描く、Ｐ・ブルック監督作。原題は“普通の速度で唄うように”という音楽用語で、モロー扮する母アンヌにピアノのレッスンに連れられる息子が、幾度もその指示を無視して弾いて、教師に叱られるのである。その最中、突然の鋭い女の悲鳴に一階のカフェ部分に降りてみると、男が物凄い形相で立ちすくみ、女が血を流して倒れ、警官や野次馬が取り囲んでいる。情痴殺人であろうが、アンヌにはそれ以上の啓示を与える光景で、その場に居合わせた青年ショーヴァンとの出会いの意味を、彼に、そして自らに問い質すのだった。それが毎日の逢瀬となり、散歩の度にすれ違うようにして二人は会った。アンヌはボルドー近郊の製鉄工場社主の令夫人であり、彼はその元従業員。お互いに生活に閉寒感を抱えており、彼女は特に、淀んだ上流の暮らしに吐き気すら催す自分を自覚させられるのだが、結局、その檻から出ることができない。ショーヴァンはそれを冷たくなじって去って行き、一人閉店後のカフェに取り残された彼女を、追ってきた夫の車のヘッドライトが照らすのだった。そびえる樹々の仰観の移動ショットや海岸の廃墟等、デュラス好みのイメージが現代人の心の荒廃に具体的な姿を与え、ブルックはそれを一応の物語の枠組みの中にカッチリと当てはめてはいる。が、それがかえって、観念的な作品の印象を強める。

【クレジット】

監督	ピーター・ブルック	Peter Brook
製作	ラウール・Ｊ・レヴィ	Raoul J. Levy
原作	マルグリット・デュラス	Marguerite Duras
脚本	マルグリット・デュラス	Marguerite Duras
	ジェラール・ジャルロ	Gerard Jarlot
撮影	アルマン・ティラール	Armand Thirard
音楽	アントニオ・ディアベリ	Antonio Diabelli
出演	ジャンヌ・モロー	Jeanne Moreau
	ジャン＝ポール・ベルモンド	Jean-Paul Belmondo
	ディディエ・オードパン	Didier Haudepin

このデータベースのデータおよび解説文等の権利はすべて株式会社スティングレイが所有しています 。
データ及び解説文、画像等の無断転用を一切禁じます。 Copyright (C) 2024 Stingray. All Rights Reserved.